

## 近代文芸学における評価問題 (2)

佐野晴夫

トーマス・マン著『魔の山』(1924)でのサナトリウムの患者群像が第1次世界大戦前のヨーロッパの精神的位相の縮図を描いたものだとすれば、『ファウスト博士』(1947)で友人アドリアン・レヴァーキューンの伝記を綴るゼレヌス・ツァイトブロームを取り囲む人物群像は、第2次世界大戦中のナチス・ドイツの知的な代表人物たちである。この作品の第34章で描出されたシクストゥス・クリトヴィス家の集会出席者のひとりに文学史家ゲオルク・フォークラーがいる。この人物を見出したとき、ツァイトブロームは次の様に洩らす。「どこから文学史家であるゲオルク・フォークラー教授への不信感は由来するのだろうか。この教授は帰属種族という観点のもとにドイツ文学の歴史を執筆した。この点で、従って、作家はそのまま作家また普遍的に教育された精神としてではなく、自らの真の、具体的な、特別の、自らにとって作り出してくれ、しかも自らによって作り出された産土の地である、つまり、血と風土とに結び付いた正真の所産として取り扱われ、また評価されるというのである。万事すこぶる誠実で、しかも批判的に言っても有り難がられる人物だった。」<sup>(21)</sup> この人名の音韻上の類推から、読者にはすでにヨーゼフ・ナードラー(1884-1963)がモデルであり、この人物の内的・外的描写からもナチスに迎合された民族学者がモンタージュされていることが読みとれる。ナードラーの詩人と文学に関する偏狭な見解をトーマス・マンが許容していないことは読者には容易に理解できる筈である。

ドイツで文芸学研究と文学史研究とは別の部門である。しかし、文芸学に携わって来たものの多くは、文学史が執筆されて来た歴史を展望したり、時代主潮や政治体制と密接に関わり合いながら、その文学の歴史の執筆が行なわれて事実を刮目した。事実、かつて、W.シェーラーが著書『詩学』で洞察したごとく、文芸作品は道徳的価値をはじめとする目的価値に基づく評価行為を経ることによって、批評が行なわれ、また言語文化の集積は配列され、説明されて来た。<sup>(22)</sup> 「国民国家」の確立が願望されるころから「国民文学史」の成立が

希求され、ドイツ国民文学の還元法による記述はトライチュケやシェーラーの影響下で「国民倫理の体系」として承認されたかに思えたとき、また同時に「ドイツ学」の設立が強調された挙げ句、——ディルタイやヴァルツェル等の学術的に正統な文芸学に裏打ちされた研究成果があったのにもかかわらず——19世紀末に誕生したドイツ帝国の時代へ入ると、「国家」と「民族」という観念の絶対化が計られ、さらに第1次世界大戦後の混乱の中で「愛国主義運動」が芽生え、やがて国家社会主義的刻印をもつ歴史編纂として際立って来るようになった。帝国時代から第3帝国時代までの道程をドイツ人の民族的「勸告者」と名乗るフォクトとコッホが「その民族の力を統一的に包括し、また国家的な名誉感情」へ扇動してナチス国家の神話形成へ導いたのたのはじめ、クルーゲやバルテルスそしてナードラー等の著述が示している。<sup>(23)</sup>

とりわけ異民族と現代のデカダンスを排斥して「血と大地」の神話を提唱したバルテルス（1862—1945）と同様に、ナードラー著『ドイツ諸種族と風土との文学史』3巻（初版1912—18）は国家文化へまで深刻に影響を及ぼし、「偉大な統一ドイツ」を、やっと文化国家として成立させようというのである。個々の地方的な文学を国民文学へ収束化させる作業は、ナードラーの言う意味で初めて試みられたことは確かであるけれども、明白な伝統に則ったものである。ナードラー自ら再三強調している様に、プラーグ大学で彼が学んだ恩師アウグスト・ザウアー（1855—1926）の「文学史と民俗学」<sup>(24)</sup> という思想的方法論の方向と結びついている。19世紀ドイツ全域に、さまざまな仕方で、地方の文学史著述が存在し、また固有なものを強調する全般的徴候のもとで、さらに個々の地方の文学が接合するドイツ国全体の政治的構想との結び付きを強調することによって一般化しえた。ナードラーは自らの文学史でもって、個々の文学の国家的また文化的な統一を目指して終始遂行することにより、多年の発展の成果として、初めて最高のものと見做しうるものを実現したと考えた。

だが、第2次世界大戦が終わると、今世紀初頭からの極端な国家主義的傾向を反映した文学史と文芸学に絶望していた研究者たちは、これらを一切唾棄すべきものと考えたかの様に、例えば、1936年にアメリカ合衆国へ移住した文芸学者フィーエトル（1892—1951）が著書『精神史としてのドイツ文芸史』（1945）で精神科学的方法の死を宣告して、同時に文学の史的研究の意義を極端に疑ったのを皮切りに、文学史執筆を拒絶した。フィーエトルの作品内訳的解釈学の輪郭はどんなものであろうか。「たとえどこで文学というものを、一般的発展過程の表現として、つまり、政治的・社会的・知的・心理的・文化的

な発展過程の表現として、あるいは副次所産として見做そうとしても——美的現象やその領域から歴史の全体空間へ移って行った。それは意味深い問題提示である。しかし、これは文芸学者の特殊な問題提示でないということが認識され始めた。その努力の主要対象は、感性的・心性的な完全さをまとって造形された作品でなければならない——他の領域の力と運動の鏡像ないし表現ではなく、《それ自体》の現象である。このことによって解釈は、またしても解釈に相応しい場を獲得する。即ち、解釈は文芸学者の主要技にして、基本技となる。文学の歴史は、だが、それとともに、二義的な位置へ移る。文学の歴史は特別の課題であり、また特別の方法を要請することを認識し始める。文学の歴史は個々の作品の意義に対する基盤ではなく、逆に、自ら解釈の仕事を目指して、まず作り上げられた。』<sup>(20)</sup> この様に、文芸学の領域では、改めて作品そのものの解釈学や現象学から、さらには構造主義から文芸研究は始めるべきものと主張するものが主流を占めるようになった。またその間に旧西ドイツ国の大学進学資格試験でもその必須科目からドイツ文学史が排除された。

無論、新しい解釈学が突如現出した現象ではないこともわれわれは承知している。文学作品を芸術的産物としてもっぱらテキストの側から考察して説明しようとする1930年代のフィーエトルの諸論文、1940年前後のコンマーレルの労作、1936年のプファイファーの業績、1941年のシュトルツの実績、1939年と1941年に発表されたシュタイガーの功績は忘れがたい。だが、1945年以前は、作品内在的解釈の方法は非政治的で、しかも、どちらかと言えば、読書法の教育的側面をおびて普及せず、精神史的方法の意義の前では色褪せ、時代の民族のアスペクトを促進するには無力と思われた。

戦後、まず、急速に、ヴォルフガング・カイザーやエーミール・シュタイガー、ホルスト・オッペルやマックス・ヴェルリ、カルル・フィーエトルやクルト・マイといった研究者間にラディカルなまでの解釈学的志向が高まったのには、その基底に2つの重大な動機がある様に思われる。そのひとつは、歴史的反省からくる批判的立場であり、いまひとつは歴史主義に対する新しい批評を確立する立場に由来する。これは、文学研究の立脚点の相違を問うことに始まる。つまり、歴史が文学を力にして、文学そのものを語らず、文学の起源や発展について論じ、また時代と社会を利用して、詩人の経歴を解明し、作品の位置づけを実現するというある種の決定論的な見解から批判されたのである。

1945年以降、ドイツ文学の研究はそれまでの国粹的な過去と決然と絶縁して、

本来の言語芸術作品の自律性へたち帰っていった。評価の問題に関しては、二度と火傷をしたくないと膾を吹く思いで、エーリック・ルンディングの如く、文芸学の政治化自体を「癌」と非難するか<sup>(26)</sup>、少なくともイデオロギー的に胡散臭いものとして遠ざけるか、それとも作品内在的な解釈による古典的、亜流的な全体論へ還元されてしまった。自ずから、意識的にせよ無意識的にせよ、社会的・倫理的・宗教的・個人的な価値は重視されて来たが、美に属さないこれらの価値は、元来、文学に固有のものでないものとして排除された。統一的造形の固有世界からなる文学は、当然、非文学的な基準ではなく、そのもの独自の内在的諸法則によって評価されるべきであった。ここで、芸術的な評価と歴史的な評価とが区別されるのである。そして芸術的な評価と歴史的評価とが合致しようと、そうでなかろうと、評価の諸問題は、結局、不毛の二者択一へ還元されるとヴォルフガング・カイザー（1906-1960）は考える。<sup>(27)</sup> だが、作品内在論的評価の理論は、文学的テキストを美的構造の分析に終わらず、その分析を通じて実行することを要請するのである。このことは、方法論的に評価行為を解釈と結び付ける要請を含むものである。<sup>(28)</sup> 精神史的構想への反動であれば、「言語芸術作品は完結体として、またそれ自体生命をもつ<sup>(29)</sup>」という確信から来る美的形式への献身は当然の帰結である。だが、カイザーが文学評価を公式美学的領域で答えようと試みるならば、一方で、解釈者の歴史的制約をのちには認めるのであるが、文学史的問題を学問の「前野」として除外せざるをえず、また他方で、彼の理論の純粹の作品内在の達成は、超時間的な芸術作品という前提が災いして、実現していない。せいぜい言語的構造の解釈が類語反復でないにしても、不十分なままに終わっている。彼によれば、真の評価は解釈の「適任者」に保留されたままである。<sup>(30)</sup>

この事実は、解釈学でも未だ完全には歴史の克服を成し遂げていないことでも判明する。解釈の「適任者」に関して、その解釈上の処置における主観的性格を新しい解釈学を提唱していたチューリッヒの文芸学者エーミール・シュタイガーも否認しなかった。それどころか、歴史的研究は単に文学の起源や作品の背景にある社会や時代の中に置かれた個人の生活の外部に求められるものではなく、例えば、比較文学的に人物像や思想の出所の究明や影響の追跡等にしても、一方的に歴史的方法を退けることは困難である。それだけに、シュタイガーも著書『様式変遷』（1958）で歴史の見解の完全な排除が困難であることを痛感した。とは言え、あらゆる文学は歴史的文獻であり、歴史研究家に文獻が

委ねられる様に、文学研究者も文学的資料を取り扱うことが出来る。だが、歴史研究家が歴史的眞実のみを追求するのに対して、文芸研究者は文学の質である美を問題に取り上げなければならない。文学史家は詩人、作品を列挙して、グループへ分類することで、様式とか、流派とか、盛期とか呼称する。ともすると主情的で印象的な観点からの判断は、価値判断の責任を回避して、時代思潮の觀念や価値判断の基準について語ることで済みます。そこに生まれるのは、価値基準の混乱とその折衷主義か、確固たる価値体系の再興が実現出来ないまま、歴史的相対主義に進む。歴史家としての客観が過去へ向けられているのに対して、批評家としての意識は現在へ向けられている。文芸批評家としての立場からは、歴史的文献に対しても、現在の自己の経験を通じて試し、思弁し、評価される。この点で、解釈学者の詩人や作品に対する態度は文学史家のそれとは明確に異なることは言うまでもない。

シュタイガーは「直接の感情」を解釈学的観方の出発点にしている。「我々に直接に開示するものが、文学的研究の対象である。我々をとらえて離さないものを我々が捉えるということが、すべての文芸学の本来の目標である」<sup>(31)</sup>と語って、彼は完全なる感情を学問的基礎として、主著『解釈の技術』(1955)でも、解釈は認識の客観性を求めて努力する能力ではなく、シュタイガーにとって、言語芸術の全体のなかでの個別的部分の内的な調子の良さを追跡する技術にすぎない。この技術は習得出来るものではない。この技は芸術作品の感情移入する「追感受」、つまり、「直接の感情」から生まれるとされている。他方、彼は『詩学の根本問題』(1946)でジャンル概念が人間の本質への問いへ関わりあう限り、「文芸学の哲学的人類学へよす寄与」<sup>(32)</sup>と考へ、伝記的またジャンル史的関連は、解釈者にとって解明上の援けを意味した。これらの諸関連は、解釈が基礎にする注釈を形作ることになるのであるが、本来の解釈は、時代と離れたもの、つまり、歴史的な社会と関連する観方と異質なものとされている。一見、矛盾する様に思われるが、この時間を越えた感動は主観的解釈の基準であり、把握は感動を前提として、文学的作品は永遠の価値として歴史的なものの彼岸にあると見做される。

こうした形式的・美的方法の傾向は、ドイツのゲルマン学だけの専売ではない。国際的文芸学でも、仏国のテキスト説明の伝統に並んでアングロ・サクソンの人々、特に英国のT.S.エリオット、米国のルネ・ヴェレックやウオーレン、さらには「ニウ・クリティシズム」の人々、ロシアの形式主義の人々まで呼び起こさなければならないであろう。

ところで、作品内在的評価理論の背後には、その理論の哲学的認知として現象学的価値論が潜んでいる。そして言うまでもなく、両者を結び付けるものは反歴史主義である。エドムント・フッサールやその門下生、魅了してやまないマックス・シェーラーをとりまく若きゲルマニストたちは、歴史的世界の形成物において客体化された精神を見て、解釈による「了解」の対象とするディルタイたちの実証心理学に対立した。当然、彼らは主観的な感情移入の態度を揚棄し、その代わりに現象の本質的な普遍的なものへ集中することによって、一種の見方である様な何か普遍的なものを学びとれると考えた。そして予めもつ知識や抽象的な規矩の影響をうけることなく、現象をその固有性において純粹に捉えて、心眼で捕捉されたその本質を慎重に記述することこそ有効と見做した。だが、そこに見つかる文学的評価に関する無数の論文の中には、いつも現象学的な基本ドグマが、陳腐な形式をとって反復されている。つまり、価値判断は「価値感 (Wertgefühl)」に基づき、「価値観 (Wertschau)」は明証性により秀でていたといったことが、共通の隠語として使用されている。当然の帰結として、価値観の能力の欠けた者は、価値に無知という刻印を打たれる。しかしながら、価値の担い手である文学そのものは、価値の有機体として価値体験を覚醒さすものである。時間の拘束をうけながらも、文学は時間を超え、超歴史的な価値を顕現さす。その絶対価値は、価値判断の相対性によってしか立証されえない。この点、作品内在的評価理論は未だ明確な解答を与えてくれないのも事実である。

文芸学が哲学的思考につらぬかれる作業は、カルル・ヨエール、エルンスト・カッシーラー、ゲオルク・ジンメル、ハインリッヒ・リッケルト、ニコライ・ハルトマンたちの例を挙げるまでもなく、ドイツ文学の研究史ではめずらしいことでもない。けれども、ドイツ文学は空しい哲学的投企にはすっかり倦んでしまっている。勿論、戦後50年間だけ顧みただけでも、文学研究者の側からパウラ・リラ著『判断と先入見』(1950)、ヘルベルト・ヴッツ著『文学評価理論について』(1957)、ヴィルヘルム・エムリッヒ著『文学評価の問題について』(1961)、マックス・ヴェルリ著『文学の価値と無価値』(1965)、ヴァルター・ミューラー＝ザイデル著『文学と関わっての評価と学術』(1969)、マキシミリアン・ヌッツ著『文学的基準と判断の社会的次元について——研究状況と問題設定への論評』(1976)、ノルベルト・メクレンブルク著『文芸学の実践的課題としての評価と批評』(1977)といった注目すべき労作が発表されている。それ

らによって未分明であった領域が、次第に顕にされつつあるけれども、当初観た様に、文学の評価のテーマそのものは文芸学でも、文学史でも、研究の中核となりえず、その問題性は相変わらず未解決のまま放置されている。

完

1999.4.30

注

- (21) Thomas Mann: Doktor Faustus. In: Gesammelte Werke in 12 Bden. Bd.6. 1960. S. Fischer Verlag. S.482. 参照 この引用箇所は Josef Nadler: Literaturgeschichte des Deutschen Volkes. Dichtung und Schrifttum der deutschen Stämme und Landschaften. Bd.4,I,6. の部分を想起させる。
- (22) Wilhelm Scherer: Poetik. S.95.
- (23) Friedrich Vogt und Max Koch: Geschichte der Deutschen Literatur von den ältesten Zeiten bis zur Gegenwart. Bd.1. 4 Aufl. Leipzig 1926. S.11. Sieh folgende von Anfang des 20. Jahrhunderts in dem kaiserlichen Reich erschienene Bücher:  
Hermann Kluge: Geschichte der deutschen National-Litteratur. Altenburg 1890.  
Adolf Bartels: Geschichte der deutschen Literatur. Leipzig 1900-01.  
Carl Busse: Geschichte der deutschen Dichtung im 19 Jahrhundert. Berlin 1901.  
Conrad Beyer-Boppard: Einführung in die Geschichte der deutschen Literatur, unter besonderer Berücksichtigung der neuesten Zeit. Langensalza 1905.  
Carl Mutzbauer: Grundriß für den Unterricht in der deutschen Literatur in den oberen Klassen höherer Lehranstalten und zum Selbststudium. München 1906.
- (24) これは August Sauer が1907年にブラーグ大学の学長就任した際の有名な記念講演の題目であり、これがナードラーの主著に直接の励起を与えたと言う。
- (25) Karl Viëtor: Deutsche Literaturgeschichte als Geistesgeschichte. S.33.
- (26) Vgl. Erik Lunding: Literaturwissenschaft. In: Reallexikon der deutschen Literaturgeschichte. Begr. v. Paul Merker u. Wolfgang Stammeler.

2.Aufl. Hrsg. v. Werner Kohlschmidt u. Wolfgang Mohr. Bd.2. Berlin 1965. S.205.

- (27) Vgl. Wolfgang Kayser: Literarische Wertung und Interpretation. In: Die Vortragsreise. Studien zur Literatur. Bern 1958.
- (28) Vgl. Johannes Pfeiffer: Umgang mit Dichtung, besonders Kapitel in II: Wertung. 8. Aufl., Hamburg 1954.
- (29) Wolfgang Kayser: Das sprachliche Kunstwerk. Eine Einführung in die Literaturwissenschaft. Bern 1948; 1971. S.387.
- (30) Wolfgang Kayser: Literarische Wertung und Interpretation. S.57.
- (31) Emil Staiger: Die Zeit als Einbildungskraft des Dichters. Untersuchungen zu Gedichten von Brentano, Goethe und Keller. Zürich 1939; 1953. S.11.
- (32) Emil Staiger: Grundbegriffe des Poetik. Zürich 1946; 1956. S.12.